みんなで未来の高校のアイデアを考えよう！

しがの高校をリ・デザインする県民ワークショップ



全6回　実施報告書

2026年9月23日～11月3日｜県内6会場
大津・南部、湖西、湖北、湖東、東近江、甲賀
主催：滋賀県教育委員会事務局
　　高校教育課 魅力ある高校づくり推進室

リ・デザインとは、これまでのつながりを大切にしながら一緒に作り直していくこと

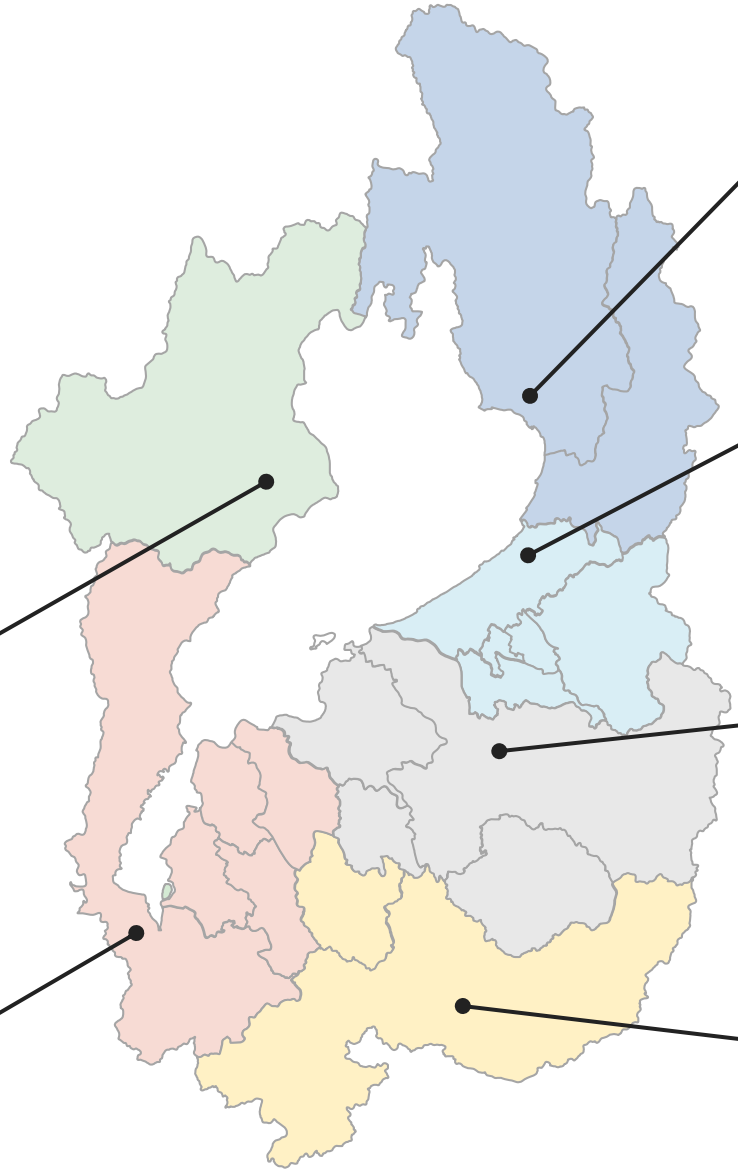




各会場の様子

6会場　県内6地域で開催（9/23～11/3）

160名　参加者



①大津・南部



9/23(水・祝) 26名

②湖西



10/4(日) 31名

③湖北



10/11(日) 35名

④湖東



10/24(土) 24名

⑤東近江



11/1(日) 25名

⑥甲賀



11/3(火・祝) 19名



01
開催概要

開催一覧

県内6地域で開催し、高校生から保護者・教職員・企業・地域の方まで幅広く参加いただいた。

回	日程	会場	参加者	テーブルホスト・運営	見学者	ワークショップで多く語られたこと
第1回	9/23（水・祝）	滋賀県庁 新館7階 大会議室（大津・南部）	26名	14名	4名	地域連携課や事務サポート職員など、学校を支える人と体制
第2回	10/4（日）	今津東コミュニティセンター（湖西）	31名	10名	4名	湖西線・通学の不便、少人数、学校以外の居場所
第3回	10/11（日）	長浜市民交流センター（湖北）	35名	9名	3名	校則と生徒主体、「湖北全体がキャンパス」
第4回	10/24（土）	COZY TOWN 彦根（湖東）	24名	13名	4名	学校の枠をこえる連合、支援が必要な生徒の学び
第5回	11/1（日）	能登川コミュニティセンター（東近江）	25名	16名	2名	校則のルールメイキング、全校学園祭、生徒会改革
第6回	11/3（火・祝）	まちづくり活動センター「まるーむ」（甲賀）	19名	12名	5名	地域立の高校、学校を1年ごとに選ぶ、世界とつながる
合計			**160名**	**74名**	**22名**	

ワークショップを円滑に進める地域ファシリテーターとテーブルホスト

ワークショップの進行をする地域ファシリテーターと、テーブル内の対話を支えるテーブルホストで運営した。

【地域ファシリテーター】 6名

第1回	大津・南部	田口 真太郎さん
第2回	湖西	大澤 健さん
第3回	湖北	中井 健太さん
第4回	湖東	綿谷 駒太郎さん
第5回	東近江	松村 亜有子さん
第6回	甲賀	中野 龍馬さん

【テーブルホスト】 15名

教育に関心のある大学生や地元の大学生、滋賀県内で活動する社会人

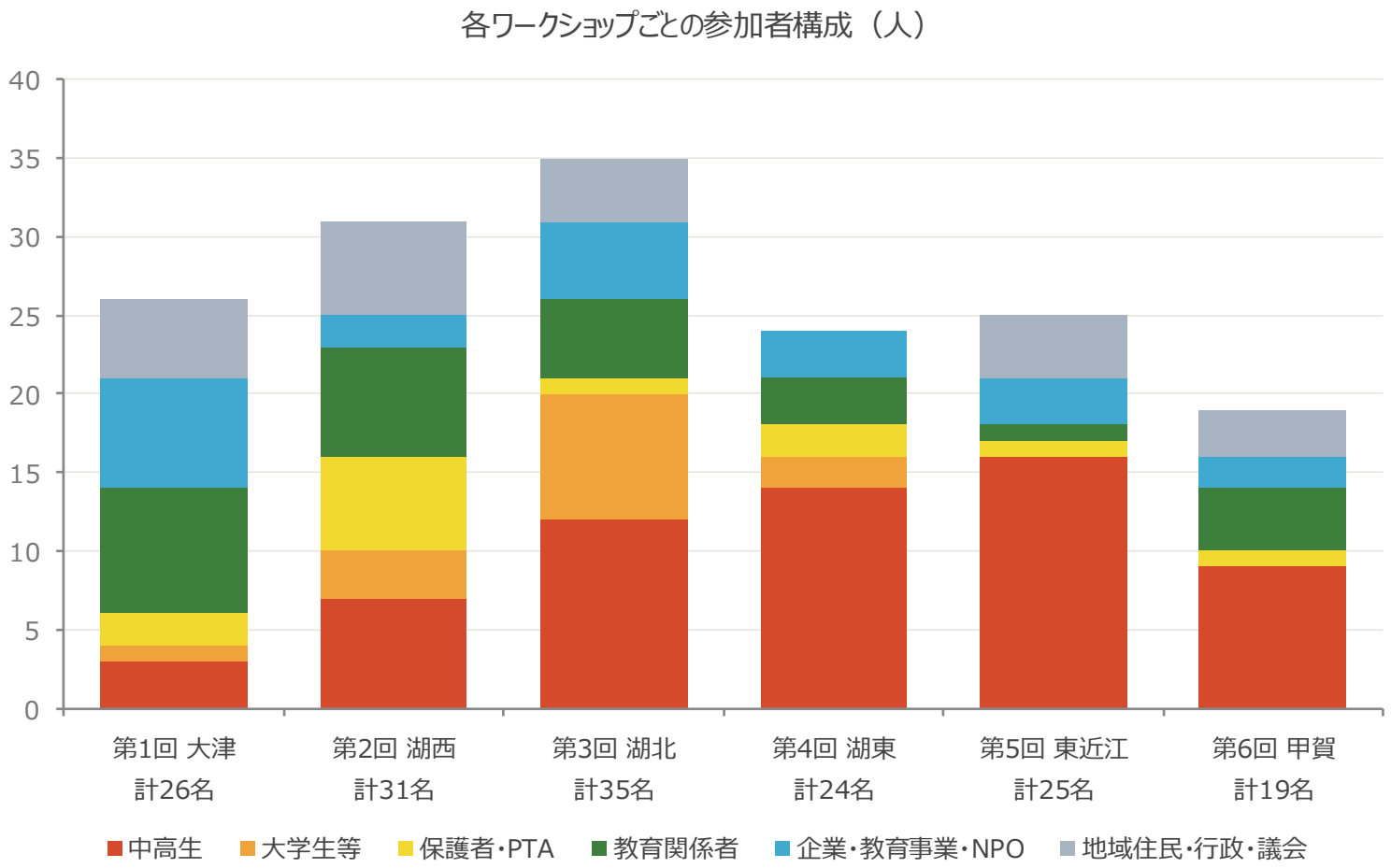
・滋賀大学　・滋賀県立大学
・立命館大学　・京都産業大学
・大阪電気通信大学　など






参加者の構成

ワークショップを実施するごとに中高生の割合が高まり、第5回では参加者の6割超が高校生となった。



全6回の内訳（計160名）

中高生	61
教育関係者	28
企業・教育事業・NPO	22
地域住民・行政・議会	22
大学生等	14
保護者・PTA	13

プログラムの流れ

前半3回は「困りごと」起点、後半3回は地域の「いいところ」起点に、後半は個人の提案をテーマ別に育て、AIで見える化した。

	①	②	③	④
第1〜3回 大津南部・湖西・湖北	**① 困りごとを出す** 高校で「もっとこうしたかった」こと／もし来年高校生なら？（第3回は「いいところ」も）	**② アイデアを広げる** 困りごとを「○○できる高校とは？」という問いに変えて自由に発想	**③ 深める・束ねる** 中心にしたいアイデアを選んで提案に。第3回は一人ひとりが提案シートに記入	**④ 発表・共有** テーブルごとに「こんな高校」として発表
第4〜6回 湖東・東近江・甲賀	**① いいところ探し** 地域と滋賀の高校の「残したいところ」「チャレンジできるところ」を出す	**② 提案シート** 一人ひとりが「これからのしがの高校への提案」を書く	**③ テーマ別に育てる** テーマ別テーブルで提案を1つにまとめ、AIでワンシーンを画像化	**④ スクリーンで発表** 生成した画像を映しながら、テーブルごとに提案を発表









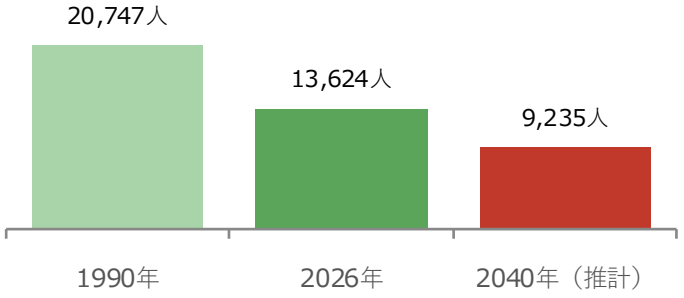
2040年を見据えた高等学校教育の在り方について

滋賀県の高校教育を取り巻く課題について説明した。





1 生徒数の減少



滋賀県の15歳人口（中学校卒業予定者数）は、2026年から2040年までに**約4,389人減（約110クラス分に相当）**の見込み

- ✓ **生徒数の減少に合わせた学校規模の検討**
- ✓ **地域の実情に応じた配置・役割**
- ✓ **多様な学びの場の確保**

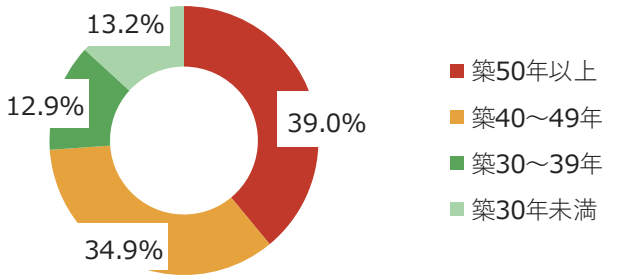
2 学びの多様化と授業料無償化

学習ニーズの多様化
- 生徒の興味・関心や進路希望等に応じた学びの多様化への対応
- 不登校生徒の増加に伴う対応や、外国人生徒等の多様な学びへの対応

地域とのつながりによる学びの展開
- 地域や企業との交流、地域人材の活用等による高校教育の魅力化
- 地域課題の解決に主体的にかかわる、地域の将来を支える人材の育成
- 地域の小中高の学校段階間の円滑な接続

国による高校授業料無償化の拡大（令和8年度～）
- 公立・私立を問わず経済的負担が軽減
- 県立全日制高校の平均志望倍率が1倍を切る
- 県内私立全日制高校への志望割合が15.9%で過去最高

3 校舎等の老朽化



- 将来的に多くの学校で改築や大規模改修が必要となり、その経費負担が大きな課題に。
- 魅力化の観点から、施設・設備の充実（専門的な学びに対応した設備機器、体育館空調など）も必要。

4 課題のまとめ

多様な生徒一人ひとりが「滋賀」という地域から学び、社会の一員としての自立を目指す学校づくりを進めるとともに、時代に合わせた新たな学び、県立高等学校の配置の在り方等を検討し、**生徒、保護者から進学先として選択される、魅力ある高校づくり**を進めていく必要がある。



02

県民ワークショップから見えた6つの方向性

6つの方向性

全6回のワークショップで出された困りごと・アイデア・提案を、6つの方向性に整理した。

1

学校の枠をこえる

他校の授業・部活・行事に参加でき、県全体や地域全体を1つのキャンパスに

2

地域・社会とつながる

地域での活動やバイトを学びと単位に。まち全体を学校に、地域の大人を先生に

3

学びを自分で選ぶ

大学のように授業を選び、オンラインと対面を組み合わせ、進路を途中で変えられる

4

生徒が主役の学校

校則を生徒がつくり、見直す。生徒会や学校運営に生徒の意見が反映される

5

通いやすさと居場所

通学手段の確保、学食・カフェ・空き教室など、放課後も含めて居られる場所

6

支える人・誰も取り残さない

地域とつなぐコーディネーター、教員の余白、不登校・支援が必要な生徒の学び

方向性1　学校の枠をこえる

生徒が減るなかで「1校で完結しない」高校についてが、全6会場で最も多く語られた。

ワークショップやアンケートで出てきた声（抜粋）

他校の生徒と授業を一緒に受けて交流したかった
部活の種類が少ない。単独チームで大会に出たい
「いろんな経験ができる」は各校で取り組んでいるが、横のつながりが弱いことが本質的な課題では？
各校や個々の学びが、せまい範囲でとどまっているのがもったいない！
他校や通信制の高校生とも交流したい
生徒や先生が減り、部活も減少している
近くだけでなく、滋賀県全体の高校とつながりたい
学校の垣根をとっぱらって他校と交流したい

出てきたアイデア・提案（抜粋）

「滋賀まるごと高校」誕生！
地域の全てが教室。部活には他校生や中学生も参加できる

滋賀の高校：1校
45校を1つの「滋賀の高校」に。各校がキャンパスになる

ホーム＆アウェイ
県立高校を自由に行き来する

“三コウ”良し
3つの学校が1つの連合に。移動中のバスで授業も

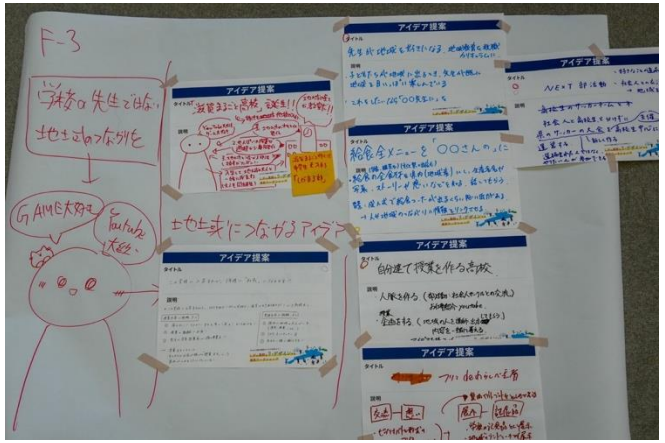
県内全部、姉妹校！！
どの高校とも姉妹校に。どの学校の部活にも参加OK

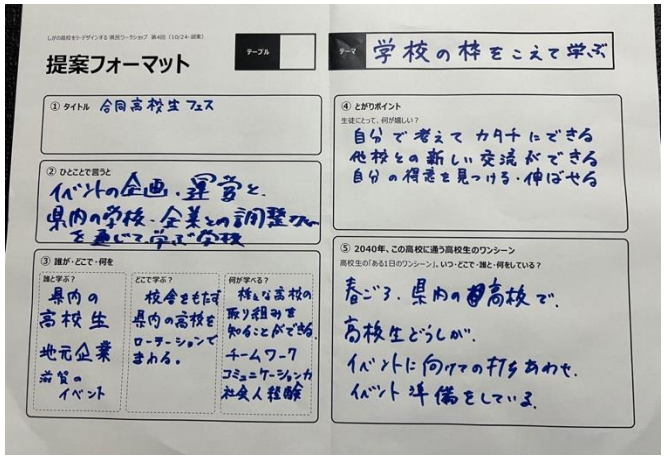
合同高校生フェス・スクール
校舎ゼロで、滋賀を巡りながら県内の高校を巡る

クラス替えみたいに学校を替わる
各校が特色を持ち、1年ごとに通いたい学校を選ぶ

甲賀地域大文化祭・体育祭
地域の全県立高校合同で、地元企業も巻き込んで開催

当日の模造紙、提案シート





方向性2　地域・社会とつながる

「学校外の大人」との出会いを、授業や単位、まちの空間の中に組み込みたい意見が出た。

ワークショップやアンケートで出てきた声（抜粋）

学校が閉じている。オモロい大人と出会いたかった
高校・部活・塾・バイト以外の社会との接点がほしい
大学の授業みたいに、地域の困り事について考える授業がほしい
学校以外の人や色んな大人と出会うきっかけがない
社会人との関わりによって、未来のことがとても考えやすくなる
地域連携の実績を、高校生・卒業生が誇らしげに話していた
地域とつながる学校はいい考え。ただ、市外の高校に通う生徒がいる現状もある
どこのグループも地域での関わり等を重視しているように感じた

出てきたアイデア・提案（抜粋）

地域連携課を高校に作る
地域企業・小中学校・自治会と高校をつなぐ窓口を校内に

高校生のワークチャレンジ
地域企業が公募した仕事に、高校生がチームで応募

湖北全体がキャンパス
1年次は伊香の森、2年次は農高の実習…と選べる

地域の人全員が教員な学校
古民家で授業、病院で保健、パン屋で調理実習

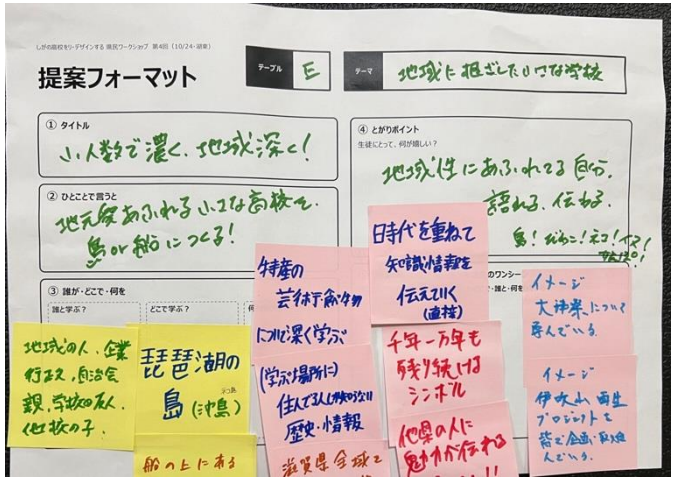
食べてつながるランチ・ミーティング
地域まるごとキャンパス・開かれた学校

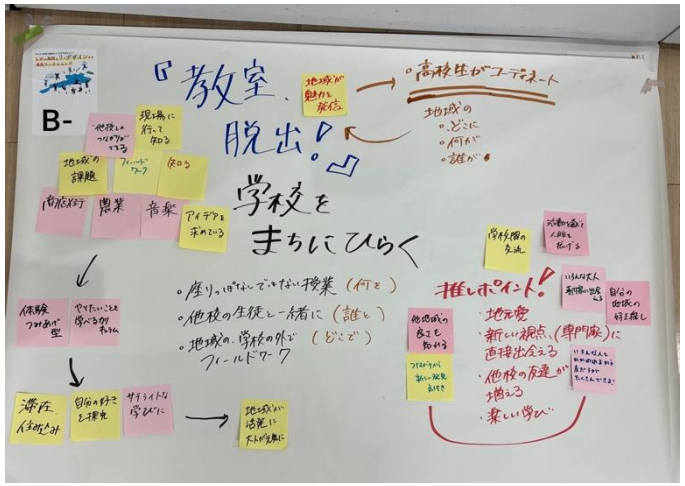
地域が学校
文化祭を起点に、まち全体がキャンパスに

税金・年金の仕組みを知りたい
平日週1日の地域バイトで、給与と税金を体験

本気のキッザニア高校
校舎から半径5kmを「領土」に。地域の会社でのバイトを単位化

当日の模造紙、提案シート





方向性3　学びを自分で選ぶ

早すぎる進路選択や一方通行の授業への違和感から、「大学のように学べる高校」が提案された。

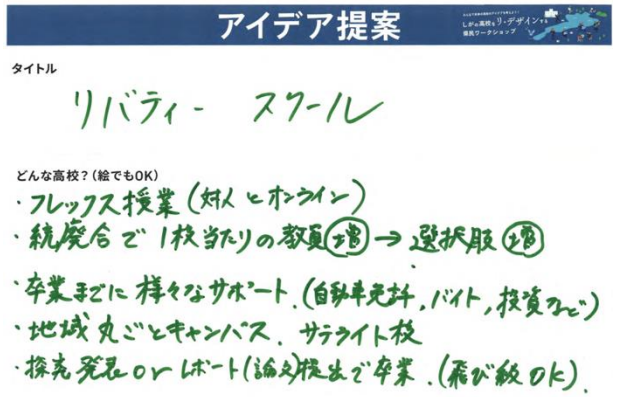
ワークショップやアンケートで出てきた声（抜粋）

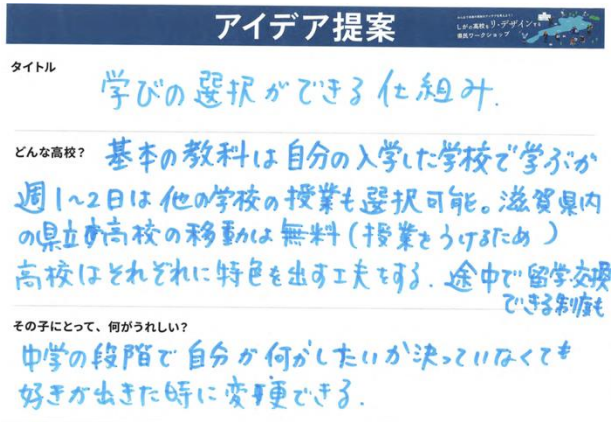
文理選択が早すぎる。文転・理転する機会がほしい
なんのためにこれを学んでいるの？
やりたいこと、やりたい学びから科目を選びたい
高校選びをミスったら人生終わりそうで怖い
普通科の「普通」って何？
授業が一方通行。話せる英語やお金の勉強を
1度決めた進路を何度でも変えられるといい
探究学習は進んでいるが、生徒は興味のないことをやらされている

出てきたアイデア・提案（抜粋）

大学型高校 ホームルームや文理選択をなくし、多彩な授業から選ぶ
オンライン・データバンク 共通の学びはオンラインで、リアルな特色は各校で
ユニバーシティ型高校 授業を自分で組み、大学での変化に少しずつ慣れる
「失敗学」という科目 挑戦そのものを評価し、学びたいことを見つけるきっかけに
リバティースクール 対面とオンラインのフレックス授業。探究発表や論文で卒業
空きコマ、戦略的サボりOK！ 規定のコマ数さえ満たせば、コマ割りは自分で決める
滋賀県立湖国統一高校 自分でカリキュラムをつくれる高校
専門科目をつまみ食い 普通科でも他校の専門科目を。1～4限は基礎、昼から出ていく

当日の模造紙、提案シート





方向性4　生徒が主役の学校

校則や学校運営を「自分たちで決めたい」という意見は、高校生の参加が増えるにつれて強く表れた。

ワークショップやアンケートで出てきた声（抜粋）

同調圧力やめてくれ。生徒の裁量、権限がほしい
間違ったらダメみたいな雰囲気
生徒の意見を集めた後、採否の理由を知りたい
校則が厳しい、変な校則（髪型・制服・ピアス）
校則の厳しさや、主体的な意思決定の不足への息苦しさがこんなに出るとは
学校教育の方針に、生徒もいっしょに参加できるようにしたい
校則の厳しさは高校によって違うが、生徒が主体となりたい思いは同じだった
やりたい事の主張だけでなく、生徒側の責任も考えたうえで発言していた

出てきたアイデア・提案（抜粋）

校長オモローブロジェクト
学校ごと・生徒ごとの「オモロイ」を実現できる制度を

生徒中心の考え方がある学校
生徒・教員・地域・県教委が一緒に学校のあり方を考える

みんなが納得できる高校！
校則をいったんなくし、先生と生徒で作り直す

生徒に任せてみる
校則や授業、体育祭などの行事を生徒に任せる

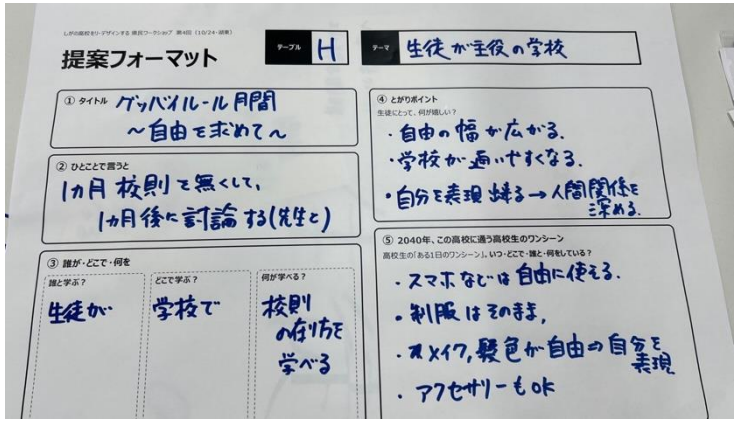
学校を多党制民主主義に
生徒会に三権分立を。意見の風通しを良く

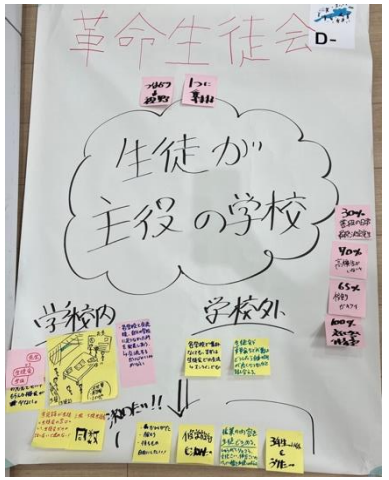
グッバイルール月間
1か月校則をなくし、先生と討論する

時代の流れに寄りそう校則へ
校則を毎年見直し、生徒が投票・立案する

革命生徒会
自分たちの学校を、自分たちの手でつくれる！

当日の模造紙、提案シート







方向性5　通いやすさと居場所

交通や施設の不便さは、学びや進路の選択肢そのものを狭めている。

ワークショップやアンケートで出てきた声（抜粋）

帰宅の時間に合うバスがない。放課後に安心して行ける場所がほしい
湖西線がよく止まる。雨の日の通学が大変
学校と家の往復だけ。学校以外に「自分たち」でいられる場がない
雪や雨の日の通学、冬の自転車通学がキツい
教室以外の休憩スペース・サードプレイスがほしい
校舎や設備が古い。学食や休憩スペースがない
バスや電車の本数が少ないので、登校するときにギリギリになる
県民アンケートでも、エアコン・空調・暑さへの言及が1,201件

出てきたアイデア・提案（抜粋）

みんなのカフェ
生徒と地域の人で運営する校内カフェ。1人でも居られる場所に

行きたい学校に行きやすく
湖西線とびわ湖線をつなぐ環状線で通いやすく

空き教室を地域に開く
空き教室や空き時間を、地域との交流やカフェの場に

駅周辺・移動販売でにぎわう
キッチンカーや地域の飲食店の日替わりランチ

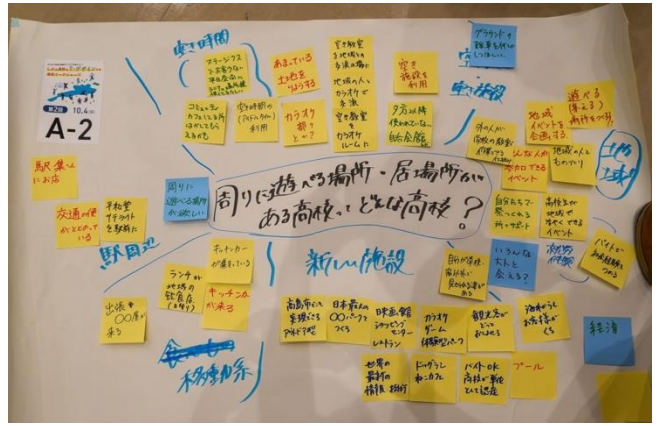
古民家でのおかん給食高校
高齢者も一緒に食べて過ごし、地域のことも学べる

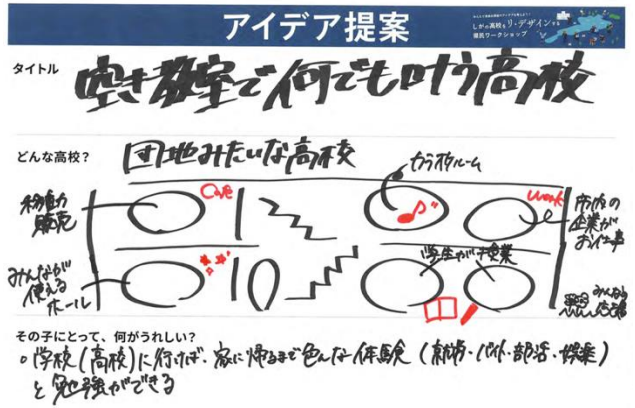
公立高校にも学食を！！
給食のような制度に。廃棄予定の食品も学校に

学習環境の最適化
Wi-Fi整備、体育館のクーラー、学校に路線バスを停車

時間にゆとりがある学校
朝や休み時間にゆとりがあれば、元気に登校できる

当日の模造紙、提案シート





方向性6　支える人・誰も取り残さない

アイデアの実現には「つなぐ人」と教員の余白が必要。多様な生徒を支える視点も挙がった。

ワークショップやアンケートで出てきた声（抜粋）

先生が忙しそうで話を聞いてもらえない。相談できる相手がいない
やりたいことのヒントをくれる、相談しやすい人が高校にいてほしい
発達の支援やヤングケアラーへの支援が足りない
不登校の子どもの行き場。子どもがゆっくり選択して進める仕組みを
40人定員を20人にすれば、もっと丁寧に教育ができる
手帳がとれない「はざま」の子が、地域の県立高校で学べる仕組みを
移動手段の保証とコーディネート人材の確保は重要
つなぐ役割を担う人が必要。授業や仕事にもう少しゆとりが欲しい

出てきたアイデア・提案（抜粋）

地域コーディネーターを各校に
外部講師・地域と学校をつなぎ、学外連携の窓口を一元化

事務サポート職員の雇用
教員が質の高い授業を準備できる時間を確保する

先生のインターンシップ
地域の現場や経営を経験できるサバティカル制度

誰一人あぶれない、柔軟な高校
「あなたはあなたのままでいい」と伝えられる制度に

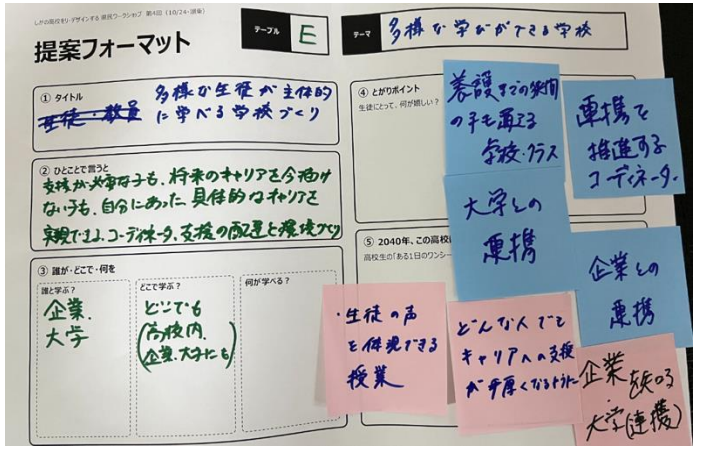
1クラスの人数を減らす
生徒減を、一人ひとりを大切にする学校づくりの機会に

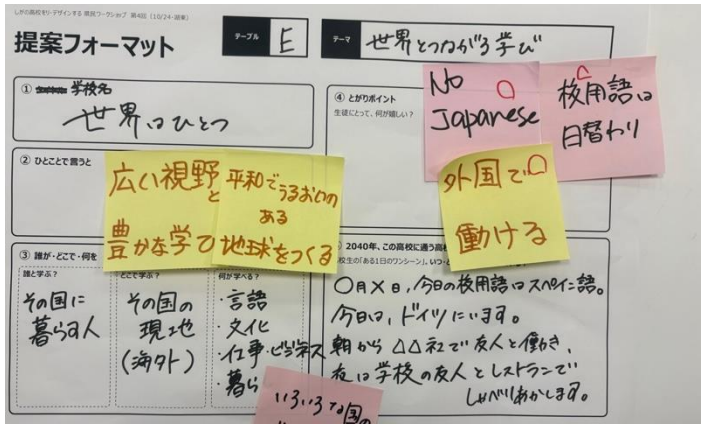
支援級の子が通える環境と科を
境界知能の子も地域で通える高校と、サポートの先生を

地域連携・高大連携の調整役
各校にコーディネーターを配置し、大学との垣根を取り払う

世界のひとつ
校内語は日替わり。外国人県民の言語と文化を学ぶ

当日の模造紙、提案シート





会場ごとの特色

共通のテーマがあった一方で、地域の実情や参加者構成によって議論の中心は会場ごとに異なった。



第1回 大津・南部

9/23（水・祝）・26名

教育関係者・企業の参加が多く、地域連携課や事務サポート職員、先生のサバティカルなど「体制」の提案が中心



第2回 湖西

10/4（日）・31名

湖西線と通学の不便、少人数のさみしさ、居場所の不足。市外進学が4割超の現状をふまえ「あなたは1人じゃない」高校も



第3回 湖北

10/11（日）・35名

高校生・大学生が20名。校則と生徒主体への強い声と、「湖北全体がキャンパス」など地域連携の実績を生かす提案



第4回 湖東

10/24（土）・24名

県民アンケート結果を共有。3校連合やホーム＆アウェイなど学校の枠をこえる案、支援が必要な生徒の学びの場



第5回 東近江

11/1（日）・25名

高校生16名が中心。校則のルールメイキング、テーマパーク型の全校学園祭、生徒会の三権分立



第6回 甲賀

11/3（火・祝）・19名

地域で受け止める「地域立」の高校、1年ごとに学校を選ぶ仕組み、外国人県民の言語・文化から世界とつながる


革命生徒会
生徒の権利
他校との交流後
自分の学校に足りないところ
を発表しあう！
先生
革命生徒会
生徒が
主役の学校
学校外
学校内

03

参加者の声と総括

参加者の声：いちばん印象に残ったこと

アンケートでは、立場をこえた対話そのものと、高校生の言葉の力に触れる声が多く寄せられた

第1回

「学び」は地域、社会、世代を超えた交流の中にあるということを、たくさんの人が考えていることがわかった。

第2回

「人とのつながりを感じる」ということが、どのグループからも出されていたのではないかと思います。

第3回

高校生のリアルな声として、特色化・実践的な学びを、というものが多く意外でした。

第4回

学校が統合されることはデメリットばかりでなく、広い地域の子どもたちの交流にもつながっていくというメリットがあることが分かった。

第5回

高校生は自分たちの手でできることを増やしたいという意欲がある子が多かった。

第6回

本当は今からでも実現できることばかりです。…まずは取り組みを変えることへ意識を向けてほしいです。

参加者が「今後話し合ってほしい」テーマ

不登校・支援が必要な生徒への対応と、高校生の本音を聞き続けることが、複数の会場で求められた。

		第1回 大津	第2回 湖西	第3回 湖北	第4回 湖東	第5回 東近江	第6回 甲賀
不登校・支援が必要な生徒への対応	学校に行きづらい子、家庭状況がしんどい生徒、支援の専門性	○	●	●	●	●	●
高校生の本音・未来像を聞く	高校生がどうしたいか、どんな未来を想像しているか	○	●	○	●	●	●
高校の配置・統合と地域バランス	合併の判断基準、北部の高校の存続、定員割れの高校を地域の財産に	○	●	●	○	○	●
2040年はどんな時代か	少子化・AI時代に育てたい力、未来像のブレスト	●	○	●	○	○	●
地域への愛着と、学校を地域の核に	高校生の地域への興味・愛着をどう育てるか	●	○	●	○	●	○
先生・学校側の思いや悩み	先生のモヤモヤ、学校運営側の考え、先生と生徒のあるべき姿	●	●	○	●	○	○
出たアイデアの実現と共有	次に進める場、アイデアを生かす・広く共有する	●	○	●	○	○	○
私立学校との関係	私立を選ぶ理由、私立との関係性	○	○	○	○	●	●

※各回アンケートQ3「今後、こんなことを話し合ってほしいというテーマはありますか」の回答を分類した

総括：将来ビジョン策定に向けた示唆

6回のワークショップから見えた論点

生徒減を「つながり」で補う設計へ	学校数・学級数の縮小が避けられない中、他校との授業・部活・行事の共有や、地域全体をキャンパスとみなす発想が全会場で支持された。統合を交流拡大の機会と捉える声もある
選べる学びと、選び直せる仕組み	文理選択の早さや「高校選びの失敗」への不安が根強い。単位制・オンライン併用・他校科目の受講に加え、途中で進路や学校を変えられる柔軟さが求められている
生徒が学校づくりに参画する	校則の見直しや生徒会改革への声は、責任を引き受ける意思とセットで語られていた。意見を集めるだけでなく、採否の理由を返す仕組みが信頼につながる
つなぐ人と、教員の余白	地域連携・高大連携を担うコーディネーターの配置と、教員が授業づくりや対話に向き合える時間の確保が、ほぼ全てのアイデアの前提として挙がった
通える手段と、多様な生徒への支援	通学手段（とくに湖西・湖北）、空調や学食などの環境、不登校・支援が必要な生徒・外国ルーツの生徒の学びの場は、地域差を踏まえた個別の対応が必要

今後に向けて

県民の声を将来ビジョン案に反映し、成果を県民にフィードバックする



県民セミナーで成果を報告

2026年12月21日（月）18:30～19:30、キラリエ草津にて開催予定（ハイブリッド）
ワークショップの成果報告と将来ビジョン案の共有を行う

将来ビジョン案への反映

6つの方向性と各会場の提案を、2040年を見据えた高校教育の将来ビジョンの検討材料として活用する

参加者から寄せられた期待

「出たアイデアをちゃんと生かしてほしい」「もっと広く地域や高校生に共有してほしい」「次に進める話し合いの場を」――対話の継続と成果の還元が求められている

ワークショップの記録・発信

各回の様子や開催報告は、以下の媒体をご覧ください。

滋賀県教育委員会 ウェブサイト

「これからの県立高等学校の在り方にかかる検討」のページで、実施概要と各回の開催報告を掲載

https://www.pref.shiga.lg.jp/edu/ma09/16745.html

滋賀県教育委員会 Instagram

各回のワークショップの様子や、出てきたアイデアをまとめて発信

OFFICIAL_SHIGA_EDU_HIGH_SCHOOL

@official_shiga_edu_high_school

インパクトラボ note

運営を担ったインパクトラボが、各回の実施報告を記事で公開

https://note.com/impactlab/m/m658305922229